令和５年５月９日

MOVE YOUR HEART！　*進路通信第２号*

大型連休が明けました。３年生は全統共通テスト模試、１，２年生は課題テストが終わりましたね。部活の大会も一巡したところでしょうか。

３年生のみなさん、今週末は全統記述模試があります。練度が高く、受験生にとって最も手強い模試です。といっても国語の場合は半分とれれば偏差値で６０くらいあります。大学入試は不十分な者同士で競うわけですから、その「半分」をめざして、解ける問題、出来る問題を地道に増やしていくのです。まずは今回解けなかった問題を解けるようにしましょう。

２年生のみなさん、充実していますか。４月のような生活を続けてください。良くも悪くも「慣れ」が出てくるのが２年生です。緊張感を持って毎日を過ごした人だけが成功と成果をつかみ取れるのです。１年生はみなさんを「大人だなあ」と思って見ていますよ。

１年生のみなさん、ここまで早かったでしょう。始まったと思ったらもう中間考査です。高校生活はこんな感じでどんどん過ぎていきます。「上級生になったら」ではなく、何事も「今から」です。前向きな姿勢を忘れないでください。

花粉が終わって新緑の季節。１年で一番気持ちのよい時期かもしれませんね。

《当面の進路に関係する行事》

５／１２（木）３年生　ビジネスプラス展
　　１３（土）３年生　全統記述模試
　　１８（木）１年生　スタサポレクチャー　　３年生　進路ガイダンス（出願手順説明）
　　１９（金）２０（土）３年生　進研共テ模試
６／　１（木）～６（火）前期中間考査

《「総合型選抜」「学校推薦型選抜」について》

従来の推薦入試、ＡＯ入試のことです。

１年生の進路オリエンテーションで触れましたね。２、３年生の人は昨年度の「進路の手引」を参照してください。ここではそれ以外の記事を載せます。

実際の大学入学者（合格者数ではありません）における比率はこうなっています（2022 年度の文部科学省統計）。

国立大では入学者総数　97,707 人のうち、　総合型　５．６％　　推薦型１１．７％
公立大では入学者総数　34,209 人のうち、　総合型　３．８％　　推薦型２５．８％
私立大では入学者総数 496,615 人のうち、　総合型１５．７％　　推薦型４１．７％
公立短大では入学者総数　2,341 人のうち、　総合型１１．５％　　推薦型４０．４％
私立短大では入学者総数 38,724 人のうち、　総合型３０．７％　　推薦型５５．９％
がその方式で合格・入学しています。

受験生の関心が高いのもうなずけますね。ただし、早期に試験があることと、特に専願の場合は他の選択肢がなくなるという点には注意が必要です。

さて、推薦の中でも「指定校推薦」については合格率が高く、有利な方式です。ただし、本校の基本的な考え方は「もともと第一志望であった学校が、たまたま指定校推薦を本校に出してくれた

ので、自分を推薦してもらうよう校長に願い出る」というものです。「一覧表の中からどれにしようか選ぶ」というものではありません。したがって、指定校推薦の一覧表は時期になったら３年生の各教室で公表しますが、過年度の指定校一覧表は参考資料として進路指導室内で閲覧することとしています。

《雑感》

川柳を見るのが好きで、なかでも「シルバー川柳」に楽しませてもらっている。先日はこんな作品があった。「うまかったなにを食べたか忘れたが」である。ニコッとしたあとで、「待てよ」と思った。シルバーでなくてもこれはあるぞ、と考え始めたのだ。

先日、視覚と触覚についての文章を読んだ（２０２２年の北海道大学の入試問題）。「視覚は、より精神的な感覚だとされて優位性（五感の中の最上位）を持つとされるが、触覚には主体と客体を入れ替えさせる性質（対称性）がある故に、自己を再発見させることが出来る」とする評論だった。「視覚は認識の本質であり、距離に影響されない。一方触覚は接触が必要で対象の認識に時間もかかる」ということから論がはじまる。

視覚の優位性に異論はないし、触覚は「知覚」とは異なる特殊性を持つという考えにも首肯する。多くの人にとって「触っただけではわからない」のも事実だろう。「直接見たものしか信じない」を標榜する人は多い。ところが自分の記憶にはっきり残っているのはなぜか知覚ではなく、感触だったりする。美しい風景を見て「絶対忘れないように目に焼き付けておこう」と思ってじっと見続けた景色が思い出せない。だが「ほんとうにきれいだったなあ」という思いは残る。景色だけではない。サッカーの試合で自分がシュートを打って決めた瞬間の感触は今でも左足に残っている。試合の展開も結果も忘れてしまったのに。さらにいえばテレビ中継があるのにわざわざスタジアムに足を運ぶのは、「生で見たい」気持ちもあるだろうが、同じ空気に浸ることを求めているからだなと最近思う。「あの雰囲気」は触覚と言ってよいだろう。「リア充」という言葉で表現したくなるのもそんな思いではないか。

食べたものの正体は忘れても、「うまかった」という感触（感覚）は残る。実際に食べて感じたことが重要であって、それが「何の味だったか」はそこまで重要ではない。実感を持って認識するには詳細な解説や、カメラのズームより、手に取った方がはやい。

「百聞は一見に如かず」というが、「百見は一触に如かず」もあるのではないか。

「うまかったなにを食べたか忘れたが」それでいい。

昨年度の全統共通テスト模試の国語、第２問の出典は山田太一の「異人たちとの夏」であった。12 才の時に両親と死別した 48 才の「私」は、両親の幽霊と浅草で出会い、それ以後両親のもとを訪れるようになる。しかし自分の生気が失われていくのを感じて両親の幽霊に別れを告げることにする。最後の晩餐となるすき焼き屋の場面が出題された。

母が「私たちなしで、よく 36 年もやってきたね」「気がせいてうまくいえないけど、お前を大事に思ってるよ」と言う。父は「お前に逢えて良かった」「お前はいい息子だ」と言う。「私」はそれに対して「自分はそんなにいい人間じゃない」と必死に否定するが、だんだん影が薄くなって消え去りゆく両親を見て衝撃を受ける。最後に母は「あんたをね、自慢に思ってるよ」と言い、父は「自分をいじめることはねえ。手前で手前を大事にしなくて、誰が大事にするもんか」と言う。「私」は幼児のような声で「行かないで」と言うのだが、二人ははかなく消えていく。

・・・不覚にも問題を解くより感情移入していた。もうすぐ母の日。